令和5年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□ ＊の数値（%）は、4段階評価の内、トップボックスの割合
□ ＊の数値（%）の下段(　)内の数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合
□ ＊のない数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	R3実績	R4実績	R5実績	前年度比
学力向上	Chromebookを活用した学習活動や家庭学習を積極的に進める。	分かり易く授業を工夫してくれているとする生徒の割合	＊47.4% （90.4%）	＊46.2% （93.8%）	＊45.2% （93.7%）	＊−1.0% （−0.1%）
	2・3年生数学科で習熟度別学習を実施し、学習意欲の向上と学習の定着を図る。					
	学力向上にかかわり「読む、書く力」を高める授業改善に取り組む。	授業の工夫、改善を組織的に行っているとする教師の割合	＊55.1% （95.9%）	＊61.2% （100%）	＊61.5 % （98.1%）	＊+0.3% （−1.9%）
	めあてと振り返りの質的向上及び協働的な学びに向けた授業形態の工夫に全教科で取り組む。					

主な取組及び成果と課題

○ 2年間の鈴鹿市教育研究会の研究委託を経て、学習の土台となる「集団づくり」について改善に向けた取組が必要であることが分かってきた。このことから、学習への内発的動機づけを高めるとともに、生徒同士や生徒と教師がつながり、仲間との関わりや承認活動などを大切にした学習活動を通して、安心できる学校とそういった環境の中で夢中になれる授業づくりを行うことが大切であると考えた。そこで、研究主題を「Heartful 神中　～安心できる学校、夢中になれる授業を目指して～」と設定し、今年度から3か年計画で研修を進めることとした。今年度は「Peaceful　～安心して過ごせる～」を1年次テーマとし、教師が生徒とつながること、教師が生徒どうしをつなげることを重点に置いた研修を行った。その結果、「学校に行くのは楽しい」と回答した生徒の割合が84.4%（前年度比＋5.6）、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した生徒の割合が92.4%（前年度比＋0.5）、「困ったことがあれば、学校の先生に相談できる」と回答した生徒の割合が92.4%（前年度比＋2.3）と、教師と生徒の関係が良好であるが分かった。
○ 「自分には、よいところがあると思う」と回答した生徒の割合が81.4%（前年度比＋5.7）、「自分もやればできるという思いをもっている」と回答した生徒の割合が84.8%（前年度比＋0.7）と、生徒の自己肯定感が高まっている。
○ 6月16日（金）に美術（第1学年）、理科（第2学年）、保健体育（第3学年）で、「Peacefulな授業づくりの工夫」を討議の柱の一つに据え、前期公開授業を実施した。「授業では、自分の考えや疑問を発言しやすい雰囲気がつくられている」と回答した生徒の割合は76.8%（前年度比＋4.6）
○ ICTの効果的な活用について研究を進め、第１学年技術科の２学期期末テストにおいて、Googleフォームで解答させる方式を採った。

■ 「クラスでは、安心して学ぶことができる」と回答した生徒の割合が87.8%（前年度比ー1.1）、「クラスでは、人に対する思いやりが大切にされている」と回答した生徒の割合が82.5%（前年度比ー2.7）となっており、生徒どうしがつながることに課題がみられる。
■ 「1時間の授業の中で、今何をしているかわからなくなることがよくある」と回答した生徒の割合が45.5%（前年度比＋1.0）、「授業の中でめあてが示されている」と回答した生徒の割合が94.3%（前年度比ー3.0）、「授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っている」と回答した生徒の割合が82.7%（前年度比ー1.5）となっていることから、授業改善を引き続き行っていく必要がある。
■ 全国学力・学習状況調査の結果から、全国との学力差が大きく（国語ー8.8、数学ー6.0、英語ー6.6）、特に国語の根拠を明確にして説明すること、英語の英作文に課題がみられる。
■ 読書時間、学校図書館の一人あたりの平均年間貸し出し冊数について、全国との差が非常に大きく、学校図書館の活用について改善が必要である。

学校関係者評価

☆　学校として子どもが安心して学べる場をつくるため努力されていることがわかった。授業改善を継続していく必要性を示されているように、授業中何をしているのかわからなくなるという生徒を減らす授業の進め方に力を入れてほしい。
☆　全国から比べると学力の差は大きいが、いろいろな要因があるように思うので、差に重きを置かなくてもよいと思う。
☆　読書は図書館活用だけではなく、調べ学習がしたくなるような授業を取り入れてはどうか。
☆　自己肯定感を高めるためその有用性を保護者にもっと伝えることが大切である。
☆　「学力の向上」を目指すために、教師の授業スキルや個々の生徒の学ぶ姿勢ということ以前に「集団づくりの改善」に着目していることは素晴らしいと思います。もし今後もその視点で改善活動を進めるのであれば、「学力向上」の前に「集団づくり」の項目を立てて経年変化を見ていくと進捗が分かりやすくなるのではないでしょうか。
☆　ICT活用においては、教科によってはテストの解答もフォームを活用するなどCBT化が進んでおり先進的です。しかし、一方で「書く」という作業も大事であると思いますので、バランスよくICTを活用してほしいと思います。
☆　「安心できる学校と夢中になれる授業づくり」を目標として研修等が行われており、生徒の回答状況からも教師と生徒の関係が良好であることがうかがえ、評価できるところである。このことが学力向上につながるように期待します。一方でクラスの中での生徒同士の関係については少し課題が残るところである。
☆　教師と生徒、そして生徒同士のつながりを大切にしていくといった取り組みは大切であり評価します。
☆　「読む、書く力」はさらに本を読むことが大切である。読書時間、学校図書館の活用など今後もっと力を入れてほしい。
☆　国語の課題「明確にして説明する」という箇所は、様々なことにつながる重要なことであるので、どのように取り組んでいくのか。

今後の改善点

来年度本校教員で取り組む校内研修において生徒同士のつながりを重視していく計画である。また鈴鹿市の小中学校で新たに取り組む「非認知能力」（やりぬく力、自制心、自己肯定感、社会性）の育成であり、これらを絡めた学力向上を図っていく。

令和5年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□ ＊の数値（%）は、4段階評価の内、トップボックスの割合
□ ＊の数値（%）の下段(　)内の数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合
□ ＊のない数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	R3実績	R4実績	R5実績	前年度比
長期欠席・不登校の改善	教育相談部会で個別の支援方策を検討するとともに緊密な情報共有を行う。 登校対策教育支援員やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、医療機関等と定期的に情報共有を行う。	先生は良いところを認めてくれていると思う生徒の割合	＊47.1% （90.3%）	＊49.0% （91.9%）	＊52.0% （92.4%）	＊+3.0% （+0.5%）
	個々の実態に応じた支援方策を検討する。 出身小学校と対応等の情報共有を図る。	自分には、よいところがあると思う生徒の割合	＊29.9% （71.3%）	＊37.4% （75.7%）	＊38.3% （81.4%）	＊+0.9% （+5.7%）

主な取組及び成果と課題

○ 近年肯定的な声掛けをする等、生徒の良さに着目した関わりを勧めてきたため、生徒アンケートでは、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した割合が92.4%（前年度比＋0.5）、「困ったことがあれば、学校の先生に相談できる」と回答した割合が92.4%（前年度比＋2.3）となり、教師との関係が良好であることがわかった。また「自分には、よいところがあると思う」と回答した割合が81.4%（前年度比＋5.7）という結果より、生徒の自己肯定感向上が見られた。
○ 校内支援教室を校内サポートルームに名称を改め、新たに担当を２名配置することで細やかな対応が可能となった。また、欠席が続き出したタイミングでサポートルームにつなぐことで、長期欠席にならず通学が可能となった生徒もいた。
○ 毎週実施する教育相談部会で、長期欠席や不登校改善に向けた支援策を検討、確認した。
○ 小学校時の家庭環境の状況の情報を得ることで、現状大きな問題がないと思われる生徒を校区に配置されたSCに繋げることができた。
○小学校に兄弟姉妹がいる生徒に関し、小学校と連携し、家庭環境の情報を交換した。また小中合同ケース会議を開催し、支援策を検討した。校区教育相談部会では、小学校と連携し、家庭への支援方針を検討した。

■長期欠席生徒の割合は、１２月末時点で16.9%（前年度8.54%）となった。
■新型コロナウイルスの収束化に伴い海外渡航の緩和により、一時帰国による長期欠席者、コトノハ通学（鈴鹿市教育委員会日本語教室）による欠席者数が増加した。
■長期欠席生徒の理由が病気やその他理由を背景とする生徒の割合が全国のポイントよりも高い実態にあり、医療や福祉分野との連携がより一層求められる。
■長期会うことができない生徒への支援方法として、校区配置されているSC、SSW連携を生かした相談体制や家庭支援を実施する必要がある。
■生徒アンケートより「クラスでは、安心して学ぶことができる」と回答した割合が87.8%（前年度比ー1.1）に留まっているため、生徒同士の関係を繋ぐためにSSTなどの取り組みが必要と思われる。

学校関係者評価

☆　サポートルームに担当を増やした効果出てきていると思う。
☆　先生方はたいへんだと思うが、１日１回はどの生徒にも声をかけ、一人ひとりの表情に気をかけてほしい。
☆　学校は様々な関係機関と連携し、不登校の改善に努力している。そのような中、家庭から出られない生徒もいると考えると一歩でも何らかの場に出られることを願う。
☆　気になる生徒がいた際、すでに学校は対応しており安心した。
☆　「長期欠席・不登校の改善」の項目にしては活動指標と成果指標の立て方が不自然に感じます。特に上二つの活動指標はそれぞれ「学校内部の情報交換、情報共有」、「学校外部との情報共有、連携」であるので、成果指標は例えば「個々の生徒に関する情報が共有されていると思う教員の割合」とか「先生が自分のことを（良くも悪くも）よく理解してくれていると思う生徒の割合」などが相応しいのではないでしょうか。
☆　長期欠席や不登校の生徒への細やかな指導、取組に関してはよくやっていただいていると思います。今後も頑張ってください。
☆　不登校の改善については様々な取り組みをされているところではあるが、依然として不登校生徒の割合は減少していない状況である。さらに実態に応じた登校支援について努力をお願いしたい。
☆　生徒の自己肯定感を高めるため、学校は様々な観点から地道に取り組んでいることがこのような数字となり表れている。高く評価します。
☆　不登校改善策は難しい。子ども一人ひとりとさらにコミュニケーションをとる目的で、学校に気を向ける行事等を考えてみてはどうか。
☆　長期欠席、登校できない生徒にカウンセラーと担任、家庭と情報交換を密にすることが大切である。小学校との連携も大切である。

今後の改善点

長期欠席生徒減少のためのサポートルームの効果的な運用、通級指導教室の利用を来年度も継続していく。また、スクールカウンセラー、医療、行政の関係機関とも連絡を密にし、不登校の状況の改善を図っていく。

令和5年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□ ＊の数値（%）は、4段階評価の内、トップボックスの割合
□ ＊の数値（%）の下段(　)内の数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合
□ ＊のない数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	R3実績	R4実績	R5実績	前年度比
人権教育の推進	いじめの問題や人権問題について教職員の情報共有を迅速で確実に行う。	クラスで安心して学ぶことができている生徒の割合	*51.4% (89.3%)	＊50.7% (88.9%)	＊46.8% (87.8%)	＊-3.9% (-1.1%)
	相談窓口の定期的な周知や、相談体制の機能強化を図る。					
	人権教育カリキュラムに基づく系統的な人権学習を実施する。	クラスで人に対する思いやりが大切にされていると捉える生徒の割合	*41.8% (86.8%)	＊39.0% (85.2%)	＊35.8% (82.5%)	＊-3.2% (-2.7%)
	いじめの問題に関する生徒会の取組を行う。					

主な取組及び成果と課題

○ 昨年度に引き続き、2年生でLGBTQの学習会を実施するなど、3年間を見据えた人権教育カリキュラムに基づき人権学習を実施した。
○ 今年度は、校区人権教育推進協議会において研究授業を行った。学校をあげて、人権学習に取り組んだ。
○ 保護者へのアンケートで、学校は人権を大切にする指導を行っていると回答した割合は93.7%で年々増加を示しているとともに、鈴鹿市のポイントを3.5ポイン上回るなど、保護者の理解を得ながら人権学習を進めることができた。
○ 保護者へのアンケートで、学校はいじめや暴力などの問題が起きたとき適切に対応していると回答した割合は85.0%で、前年度に比べ5.2ポイント上昇し、鈴鹿市のポイントも0.3ポイント上回った。
○ いじめ問題への取組の一つとして、生徒会で三重県教育委員会主催のいじめ防止動画コンテストに応募し、生徒会主体のいじめ防止の取組を実施した。
○ 学校いじめ問題協議会を毎学期1回開催し、いじめアンケートの状況や学校のいじめの問題への取組状況や対応方針等について協議した。

■ 生徒へのアンケートで、クラスで安心して学ぶことができている生徒の割合や、クラスで人に対する思いやりが大切にされていると捉える生徒の割合は、ともに目標値に至らず、不十分な実態にとどまった。
■ 生徒へのアンケートで、学校に行きたくないと思うことがある生徒の割合は59.3%で年々上昇傾向にあり、鈴鹿市のポイントを3.9ポイント上回ることとなった。
■ 人権課題について教職員の資質向上を図る研修を実施し、人権学習の充実や学校全体で継続的に人権感覚の向上に取り組んでいく必要がある。
■ 人権ネットワークに参加する生徒が年々減少している状況の改善を検討する必要がある。
■ 次年度、ぬくたいフェスタが20回目を迎えることから、改めて学校全体でぬくたいフェスタの意義や取組を浸透させていく必要がある。

学校関係者評価

☆　人権学習は小学校から引き続き実施されているため生徒の意識は高いと思う。
☆　思いやりの心はまわりの大人（親、教師など）のことば、行動が大切だと思う。生徒はまわりの大人を踏み台にして学んでいると思う。
☆　いずれの成果指標も実績（数値）が年々下がってきていることが心配です。2年前はコロナ禍であったことも考慮する必要があるのだと思います。コロナの影響についての分析は難しいですが、数値がさがってきていることを真摯に受け止め、学校内でしっかりと議論し中長期的な改善方策を練る必要があるのではないでしょうか。
☆　一方で生徒会主体の動画コンテストの応募などは素晴らしい取組だと思います。このような取組を継続・発展させていただきたいと思います。
☆「クラスで安心して学ぶことのできている生徒の割合」、「クラスで人に対する思いやりが大切にされていると捉える生徒の割合」が減少傾向であり懸念すべき状況である。
☆　人権教育について積極的に取り組まれている学校に対し評価させていただきます。
☆　いじめへの対応はまずアンケートで子どもの実態を把握すること、教師は小さなことでも見逃さず、相談できる雰囲気づくりを行ってもらいたい。
☆　学校へ行きたくないと思うことがある生徒の割合が59.3%というのは気になる。原因を知る必要がある。
☆　人を思いやる気持ちが安心して学校で過ごせることへつながると思うので、思いやる心を学ぶ取組をすすめてほしい。
☆　SNSでいじめ問題が起こる。見えないところであるためどのような対策を行っているのか。

今後の改善点

来年度本校教員で取り組む校内研修において生徒同士のつながりを重視していく計画である。コロナ禍を経験してきた現在の生徒にとり、人と人とのかかわりを制限されてきた3年間を取り戻すためにも、学校における行事の中でつながる場面を増やし改善を行いたい。

令和5年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□ ＊の数値（%）は、4段階評価の内、トップボックスの割合
□ ＊の数値（%）の下段(　)内の数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合
□ ＊のない数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	R3実績	R4実績	R5実績	前年度比
特別支援教育の充実	特別支援教育コーディネーターを要とした支援方策の連絡調整機能の充実強化を図る。	特に配慮を要する生徒への組織的工夫改善への教師の割合	*42.9% (93.9%)	＊49.0% (91.8%)	*43.8% (96.2%)	＊−5.2% (4.4%)
	特別支援学級担任、協力学級担任、特別支援教育コーディネーター、介助員等との緊密な情報共有を行い生徒理解を深める。					
	保護者に学習や生活場面での伸びや進歩についてこまめに伝える。	教師は、生徒のことをよく理解していると捉える保護者の割合	77.6%	79.7%	79.5%	−0.2%
	保護者の不安や願いを把握する機会を設定する。					

主な取組及び成果と課題

○ 校内通級指導教室「きらっとルーム神戸」を新設し、個別の生徒支援やソーシャルスキルトレーニングを実施する時間を設定した。
○ 特別支援教育推進委員会を毎週開催し、個別の支援を必要とする生徒の情報交換を密に行い、支援のあり方を話し合う機会を設けた。
○ 特別支援教育コーディネーターを配置し、定期的に特別支援学級担任間の情報交換会を実施し、生徒理解や指導上の課題等について把握する機会を設けた。
○ 校区小学校の特別支援教育コーディネーターとの連絡会を開催し、校区での早期支援や中学校卒業後の進路選択について共通理解を図った。
○ 校区保・幼・小・中の特別支援教育コーディネーターで事例検討や実践報告を行い、校種を越えて連携を図った。
○ 定期的に支援会議を開催し、生徒の保護者からの要望を取り入れながら支援方法を検討する機会を設けた。

■ 教師が、特別支援教育や発達課題に適切に対応するための指導力や資質向上を図るための研修を計画する必要がある。
■ すずかっこファイル・すずっこファイルの活用促進や発達課題への対応を充実させるための組織体制を検討する必要がある。
■ 様々な支援を必要とする生徒についての特性理解や個別支援等について検討したり、共通理解したりする機会を設けるなど、一人ひとりの生徒に応じた支援や生徒理解を充実させる必要がある。
■ 早期からの発達支援を充実させるとともに小学校教員と中学校での特別支援教育について、継続的に理解を深める機会を設けることが必要である。

学校関係者評価

☆　今後も保幼小中連携を続け、一人ひとりの発達に合わせた支援を続けてほしい。また、中学卒業後にもつなげて欲しい。
☆　支援学級であった卒業生が出勤の際、学校横を通るとき先生の姿を探している様子が見受けられる。きっと楽しい中学校生活を送れたのだと思うと心が温まる。
☆　特別支援教育については本当によくやっていただいていると感じます。最近は大学においても「合理的配慮」の意識・取組が進んでおり、対応する担当部署（支援センター等）が大学内にできつつあります。困り感のある学生はそういった担当部署に申し出て合理的配慮等を受けることができますので、支援や配慮が必要な生徒のみなさんも大学進学を視野に入れて勉強に頑張ってほしいと思います。
☆　特別支援教育コーディネーターが中心となり学級担任との情報交換会、また校区小学校との連絡会を開催するなど取り組まれており評価するところであるが、さらに保護者の不安や願いを把握し、理解を深めていただきたい。
☆　特別支援教育について多角的に取り組まれていることを評価させていただきます。
☆　支援学級では保護者と教師の情報共有や話し合いが行い易い体制がとれている。
☆　卒業後の進路について具体的な情報が欲しい。
☆　一人ひとりの生徒への学習が行えている。

今後の改善点

教師にとって、特別支援教育が教育の原点であることを再認識して取り組みを進めていく。特に一人ひとりの生徒にかかわる情報を大切にして、教師間での共有、意思疎通を今まで以上に行っていく。

令和5年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□ ＊の数値（%）は、4段階評価の内、トップボックスの割合
□ ＊の数値（%）の下段(　)内の数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合
□ ＊のない数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	R3実績	R4実績	R5実績	前年度比
教職員の総勤務時間の縮減	定時退校日の主体的設定に取り組む。	一人あたりの月の平均時間外労働時間	19.4 時間	19.0 時間	17.6 時間 （12月末時点）	−1.4時間
	部活動指針に基づき部活動活動時間及び休養日を遵守する。					
	毎月の教職員の勤務実態を提示し、働き方改革への意識向上を図る。	1人当たりの年平均休暇取得目標日数	20.0日	21.8日	17.0日 （12月末時点）	**昨年12月末 17.3日 と比較すると −0.3日**
	毎月1時間以上の休暇取得を推奨する。					

主な取組及び成果と課題

○ 教職員一人当たりの月平均時間外勤務時間は17.6時間（12月末時点）で、コロナ禍以前の勤務時間に比べ減少している。
○ 毎月定期的に各月の勤務実態について教職員に周知し、総勤務時間縮減に向けた意識向上を図った。また、昨年度に引き続き研修主任と学力向上担当とを分け、業務の分散化を図った。
○ 生徒の欠席連絡を、グーグルフォームを活用し実施できる仕組みをコロナ禍から継続し、利用定着を図った。

■校務分掌担当の偏り解消や業務の廃止又は見直しが不十分にとどまっていることから、特定教員への業務負担が解消できていない。
■ 休暇取得促進に向け、長期休業中の休暇取得を働きかけるなどしたが、休暇取得日数は横ばいである。
■ 会議時間の短縮がなかなか進んでいない実態があり、他の会議等との重複内容の廃止や説明時間の短縮などをさらに意識化する必要がある。
■ 時間外勤務時間が月45時間超及び年間360時間超の教職員が少数いる。
■ コロナ禍で見直した学校行事のあり方を検証し、より効率的で負担軽減につながるとともに教育効果が得られる内容や方法を検討する必要がある。
■ 教職員の実質的な勤務状況に一層留意し、勤務実態の的確な把握を行っていく必要がある。

学校関係者評価

☆　年々教師に課される仕事が増えるように思うが、業務を見直し時間外勤務を減らし、休息も十分とり健康な体で生徒に接してほしい。
☆　以前は教師の業務にはなかったものを子どものためとして担っていただいていることに感謝する。その子どもの前に立つ仕事であるため心身ともに健康であっていただきたい。
☆　個人的には「働き方改革」は「学校における教育活動改革」であると考えています。すなわち、これまで教員が「生徒のため」と思って取り組んできた全ての業務についていったん整理する必要があり、そのためには生徒はもちろん保護者、地域が一体となって議論していく必要があります。中学校では部活動指導の外部委託が進んでいるようですが、部活動だけでなく、本来家庭や地域が担うべきことについてしっかりと議論し、各主体が協力しながら子どもの育成を図っていくべきだと思います。
☆　貴重な人材である教職員が永く教育現場で活躍できるよう、職場環境改善など様々な取り組みをされていることを評価させていただきます。
☆　教師自身も決められたルールを守ることが大切である。
☆　業務によりデジタル化を行い、時間削減できるところに活用し休暇取得につなげられれば良い。
☆　教師への負担が増えることにより生徒と触れ合う時間減少につながらないように取り組んでほしい。

今後の改善点

校務の偏りを解消し、会議時間を縮減、他の会議のと重複を減らす。効率的な業務推進を検討する。引き続き毎月，定時退校日を設定し，時間外勤務縮減を図り、部活動指針に基づいた部活動を運営していく。

令和5年度　学校自己評価書・学校関係者評価書

□ ＊の数値（%）は、4段階評価の内、トップボックスの割合
□ ＊の数値（%）の下段(　)内の数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合
□ ＊のない数値（%）は、4団評価の内、上位2項目の肯定的評価の割合

鈴鹿市立神戸中学校

項目	活動指標（改善方策）	成果指標	R3実績	R4実績	R5実績	前年度比
学校と地域との連携	学校運営協議会委員や保護者・地域への積極的な情報発信を行う。	通信やHPなどで、情報を家庭へ積極的に提供していると捉える保護者の割合	87.3%	92.9%	90.4%	−2.5%
	校区小中学校連携各部会での具体的な取組を実施する。					
	家庭学習定着に向けた学校運営協議会での協議を行う。	教育方針をわかりやすく伝えているとする保護者の割合	68.9%	73.8%	74.4%	+0.6%
	学校支援ボランティアの活用を検討する。					

主な取組及び成果と課題

○ 昨年度と同様に特別支援教育への見識や保護者の立場にある方、地域づくり協議会との連携や教育行政等の経験豊富な方に引き続き委員になっていただき、学校運営協議会の機能継続を行った。
○ 学校運営協議会委員の方に学校教育活動の状況をよく理解いただいた上で熟議いただくことを考え、学校運営協議会委員の授業参観や生徒会役員との意見交換会を実施した。
○ 校区学校運営協議会全体会を開催し、「あいさつ運動・交通安全・家庭学習・子どものネット環境」の4つのテーマに分かれたグループワークを通じて、校区各学校の状況について共通理解を深めた。
○ 学校運営協議会委員へのアンケートでは、協議の活性化、委員の学校訪問、教育課題の協議などの項目で、昨年度よりも肯定的評価が得られた。

■ 学校ホームページ等での情報発信の利点もある中、一方で個人情報の流出を防ぐ観点も重視されつつある中、保護者アンケートでは、昨年度より2.5ポイント減少した。
■ 地域の人的・物的資源の活用に着目した教育活動を検討する必要がある。
■ 学校運営協議会委員へのアンケートでは、教育課題の改善やコミュニティ・スクールの必要認識に課題があると受け止められる。そのため、協議内容の系統性や焦点化を図るなど、教育課題改善への具体的協議として発展を図り、学校運営協議会の機能的で実効性ある活動を目指す必要がある。
■ 校区学校運営協議会全体会での意見交換を反映させ、校区として連携協力して取り組める具体的な動きを検討する必要がある。
■ 校区幼小中連携による教育活動を進めるため、継続した定期的な部会開催を通じ、幼小中の教育活動への共通理解を深めていく必要がある。

学校関係者評価

☆　地域で協力できることにはできるだけ協力していきたい。少しでも子どもたち、学校のためになることには連携していきたい。
☆　学校運営協議会委員の高齢化が他校でも課題になってきている。学校と保護者の間に入ることのできる年齢以上であるとなかなか今の学校現場のことが理解できないのでは、若い方にもっと入っていただきたい。
☆　学校運営協議会をもっと機能的で実効性のあるものにしようと思えば、もう少し保護者の方にメンバーに入ってもらう必要があるのではないでしょうか。協議会で議論したこと、決めたことを実行に移すとなると、協議会のメンバーだけではどうしても動きが鈍くなります。多くの保護者のみなさんの力を借りてなら実行可能に近づくのではないかと考えます。
☆　学校の状況などをできだけ早くわかりやすく保護者や地域の方へ情報発信していただきたい。
☆　学校運営協議会を数多く開催され豊富なテーマ、メニューについて充実した協議が行われている。高く評価します。特に中学校区の合同協議会を実施されたことはたいへん良いことだと考えます。
☆　地域の活動、行事もコロナ禍前には戻っていない。そこで、学校行事に地域の人たちの足を向かせてはどうか。
☆　学校運営協議会では意見交換や話し合いをしっかり行われている。今後の活動に、より生かされるよう取り組みたい。

今後の改善点

災害時を想定し、本校においても来年度保護者への生徒引き渡し訓練を初めて行う。そのため、小学校（1校）、学校運営協議会委員、地区市民センターとも連携し、訓練を行う予定である。学校を核とした地域との連携例としたい。